

令和 8 年度 栄東中学校入学試験問題

東大特待(1月12日)〔国 語〕 (50 分)

受 験 番 号	
------------	--

氏 名	
-----	--

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 監督^{かんとく}の先生の指示があったら、問題用紙と解答用紙のどちらにも受験番号と氏名を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で 27 ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて解答用紙に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問があったら、だまって手をあげて監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、問題用紙と解答用紙は別々にして、監督の先生の指示にしたがって提出してください。
8. 字数指定のある問題は「、」や「。」などの記号も 1 字として数えるものとします。

一 次の（１）～（８）に当てはまる最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ漢字に直して答えなさい。ただし、語群の言葉は一度ずつしか使いません。

- ・ 武道においては、（１）の美しさが技の完成度を左右する。
- ・ 祖父は手術後、温泉地で（２）している。
- ・ 自国の（３）を守るために、外交手腕を發揮したい。
- ・ 当初の計画が白紙に^{もと}戻り（４）の策を講じる必要に^{せま}迫られた。
- ・ （５）は万病のもとだと言われ、父がダイエットを始めた。
- ・ メンバーに女性は彼女^{かのじょ}ひとり、（６）でがんばっています。
- ・ 医者になりたいという、将来の（７）を描^{えが}いていた。
- ・ 転職したての（８）だからこそ、しがらみにとらわれずに発言できる。

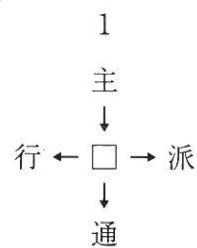
【語群】

ひまん	じぜん	したい	あおじゃしん
こういつてん	けんえき	しんざんもの	せいよう

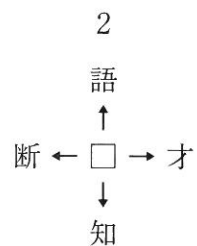
二 次の□に漢字を入れると熟語が四つ完成します。例にならって□に入る漢字を答えなさい。ただし、熟語は矢印の方向通りに読むものとします。



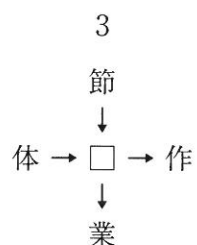
のぎへん 9画



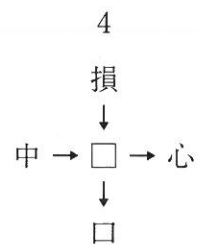
さんずい 10画



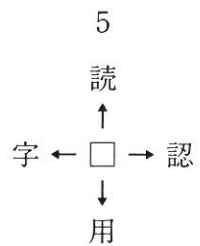
くさかんむり 8画



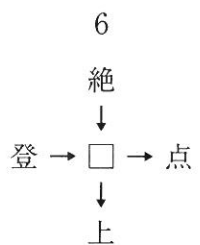
てへん 16画



にんべん 13画



ごんべん 14画



おおがい 11画

【三】 次の（１）～（８）に当てはめるのに、最も適切な言葉をあとの語群から選び、記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

- ・ 真夏の日差しが（１）と照りつける。
- ・ 適当な大きさに切った食材をなべに入れ、水を（２）に注いだ。
- ・ 長年の使用により油で（３）とした換気扇をそうじした。
- ・ 安っぽい（４）な布地で作られたシャツを着る。
- ・ ろうそくの火が、静かな夜に（５）と揺れていた。
- ・ 辛いものを食べたあとはいつも舌が（６）とする。
- ・ おじいさんが（７）と話したので、内容が聞き取れなかった。
- ・ 昨日の夜からおなが（８）と痛む。

【語群】

ア	ちろちろ	イ	もそもそ	ウ	ひたひた	エ	ひりひり	オ	ぺらぺら
カ	ぬらぬら	キ	しくしく	ク	かんかん				

【四】 次の文はいくつかの辞書で食品添加物を調べたものです。これを参考にあとの文章を読んで問いに答えなさい。なお作問の都合で表記を一部改めています。

食品添加物

- 辞書① ・ 食品を調理したり、加工・製造するときに、食品に味や風味をつけたり、見せかけをよくしたり長く保存させるために加える化学的合成物質をいう。
- 辞書② ・ 食品の製造・加工などの過程で、品質保持、保存性の向上、着色・調味・酸化防止などのために使用する物質。天然物から得られたものと化学的に合成したものがある。
- 辞書③ ・ 食品の加工や保存などの目的で添加・混合される化学物質。食品衛生法によって規格や使用基準が決められている。
- 辞書④ ・ 見かけをよくしたり腐らせないようにしたりなどするために、食品に混ぜるもの。からだに有害な物質が含まれることがある。

ここまで述べてきたように、食品表示については表示して選びたい側である消費者や一部生産者と、できるだけ使われているものを公にせず買わせたいメーカーの思惑のせめぎ合いが存在する。

さらに大きな力としてあるのがアメリカだ。私が『小説 日米食糧戦争 日本が飢える日』（講談社）という本を書いたのは2009年だが、以前からアメリカとの関係には注意を払ってきた。大きな話でピンとこない方も多いかもしれないが、以下をお読みいただければその知られざる力の強大さに気づくと思う。日本の農業の歩みはある意味でアメリカの外圧との格闘の歴史ともいえるかもしれない。

まず例として紹介したいのが1975年に起きたポストハーベスト騒動だ。若い方の中にはポストハーベストといっても知らない方もいるかもしれないので簡単に説明する。アメリカをはじめとする海外で広く認められる一方で、日本では禁止されている農薬処理のひとつが「ポストハーベスト農薬」だ。その名の通り収穫（ハーベスト）の後（ポスト）に農薬を散布する。

特に海外へ輸出する農産物に対しては害虫の駆除やカビの発生および腐敗を防ぐ目的で施されるのが一般的だ。日本では、当時も今も、残留農薬という観点から国内でのポストハーベスト農薬は原則として禁止されている。

厚生省は75年の段階で、ある柑橘類の輸入について禁止する警告を出していた。ポストハーベスト農薬を収穫後に使用したと表示されていたためだ。その農薬とは、殺菌および防かび剤のオルトフェニルフェノール（OPP）と防かび剤のチアベンダゾール（TBZ）。どちらも国内では認可されていなかったことも大きく影響していた。

同年、農林省の技官が、税関手続きを待っていた、いわゆる保税中のアメリカ産のレモンなどから基準値を大幅に超えるOPPを検出。倉庫に保管されていた大量の柑橘類が、不合格品となって海洋投棄処分された。

これに対しアメリカは激怒した。当時のアメリカメディアは、カクテルにたとえながら日本批判を大々的に展開した。「日本が太平洋をトム・コリンズにした」

トム・コリンズとはジンベースのカクテルで、ジンにレモンジュース、砂糖、氷、炭酸水を入れて作る。

アメリカが激怒した、と書いたが、これは私の思い込みではない。アメリカ政府はOPPの使用を日本へ強く求め、認めなければ日本からの自動車輸出を制限すると公然と脅してきたのだ。日本国内ではOPPの使用に対して消費者が強く反対したが、厚生省は2年後の77年に認可してしまった。しかも、そもそも農薬のはずのOPPを、収穫後にかけた場合には食品添加物として指定するといふ、アメリカの要望に沿ったウルトラC的な超法規的措置が取られた。翌78年にはTBZも食品添加物として指定。今なお認可された食品添加物としてリストに載っており、スーパーなどで今も販売されている。

自動車輸出を守るためにアメリカへ¹を差し出した、と激しく批判された一連の経緯は「日米レモン戦争」と呼ばれた。

二つの農薬が矢継ぎ早に食品添加物として指定された当時を、私はいまでも鮮明に覚えている。そのころ私は、79年10月の第35回総選挙へ初めて出馬しようと、選挙区の旧長崎2区で準備を進めていたからだ。

若いころは生まれ故郷の五島列島で牧場を経営し、抗生物質を使わない自家配合の飼料を牛や豚に与えようと、小麦の有機栽培を試みた時期もある。そうした経験を通して、日本における食の安全・安心に強い関心を持つようになった。

おりしも日米レモン戦争が繰り広げられ、日本の国産レモン栽培が大打撃を受けている真つ只中²にあった。

①明治時代に静岡県で栽培が開始されたレモンは、食生活の西洋化に伴う消費増と価格高騰を受けて急速に普及。瀬戸内海の温暖な気候が栽培に適していた広島県は全国一の国産レモン生産地として知られるようになった。

しかし、レモンの輸入が自由化された64年を境に、海外の安価なレモンが大量に流入するようになった。76年には広島県の島嶼部が大寒波に襲われる。国産レモンが直面した危機で政府は農家さんの支援とはまったく逆の政策を行ったというわけだ。

②確かに当時、日本のレモン農家には助成金が支払われた。これは生産量減少への補助ではなく、十分な補償で廃業を促す意味合いの方が強かった。本来ならば認められないOPPやTBZを食品添加物として指定したことからそれは明らかだろう。

広島県の島嶼部は81年にも大寒波に襲われ、数多くのレモンの木が枯死する。輸入レモンへの依存度が高くなったところで、アメリカは一気にレモンの単価を上げたのだった。

③あれから40年を超える時間が経ち、国産レモン栽培は復調している。広島県では、ブランド名として「瀬戸内広島レモン」を確立させた。輸入レモンに比べて、無農薬の国産レモンは2倍から4倍と高値だが、需要があることの証左だろう。

現在、日本のレモンの自給率は10%前後だ。半世紀ほど前の日米レモン戦争で政府が下した決断が、その後の日本のレモン農家さんの行く末を大きく左右し、消費者にとっては国産を買いたくても高値となった。勝者がどちらだったのかは、あらためて言及するまでもない。

④食の安全・安心を求めて長く活動をとみにしてきた、鈴木宣弘教授の著書『農業消滅 農政の失敗がまねく国家存亡の危機』（平凡社新書）には、次のような記述がある。「食品添加物に分類すると、輸入したレモンなどのパッケージに、本来は禁止農薬であるOPPやイマザリルの名前が表示される。アメリカは、これが日本の消費者にマイナスのイメージを与えるから、この表示をやめろ」と言い出し、現在進行中の日米交渉で表示そのものの撤廃の議論が進められている」

食品表示法では、OPPやイマザリルなどの防かび剤においては、特例として売り場での表示が指導されているが、そもそも義務ではない。それを「やめろ」といっているとは暴論だ。

⑤もちろん、こういった農薬が使われたうえでも納得して購入する人もいるだろう。しかし、そもそも表示をなくしてしまったら消費者は選ぶことができない。

鈴木さんの著書にあるイマザリル（エニルコナゾール）は防かび剤で、日本で農薬として登録されておらず、本来は使用できない。しかし、OPPやTBZと同じウルトラC的なスキームが用いられた。すなわち、農薬としては登録しないが、1992年に食品添加物として指定され、ミカンを除いた柑橘類やバナナに用いられるようになったのだ。

2000年代に入ってからと同様な形で、農薬のフルジオキシニル、アゾキシストロビン、ピリメタニルが食品添加物の防かび剤として指定された。しかも対象が柑橘類やバナナから、桃や梨、りんごに加えてキウイ、パイナップル、パパイヤ、アボカド、マンゴー、ザクロ、ビワなどさまざまな果物に広がっている。

20年に指定された浸透性殺菌剤のジフェノコナゾールの対象はじゃがいもやきゅうりだ。浸透性の農薬は、水で洗っても煮ても焼いても農薬の主たる成分がそのまま残る性質を持つ。

食品の安全確保や国民の健康を保護することを目的として作られ、食品添加物についても規定している「食品衛生法」は、戦後間もない47年に制定され、以後、40回を超える改正が行われてきた。なかでも95年の第16次改正は、世界保健機関（WHO）や世界貿易機関（WTO）などの国際機関の要望を受けて、日本国内での基準を国際基準へ整合化させた点で、食品添加物の歴史においても大きな転換点になっている。

それまでの食品添加物の指定制度は、化学的合成品に限定されていた。しかし、第16次改正を受けて、カカオ色素やトマト色素、タマネギ色素、ヒアルロン酸、グルコサミンなど、天然添加物と呼ばれていた天然由来の物質も「既存添加物」と名称を変えた上で、食品添加物の対象に加えられた。

同時にそれまでの食品添加物は「指定添加物」と名称を変更。食品添加物は動植物から採取される天然の香料原料である「天然香料基原物質」と、ウコンや各種果汁、野菜ジュース、ココア、卵白、寒天など通常は食品とされるものの、用途によって食品添加物となる食品原料の「一般飲食物添加物」を加えた4つに分類された。

そのなかで天然添加物がそのままリストアップされた既存添加物は安全性が順次評価され、結果によって指定添加物に追加されるか、安全性に懸念が認められたものや使用実態がないものは削除されていた。

24年3月時点のリストを見ると、95年当時は500品目近かった既存添加物は357品目に減少。逆に約350品目だった指定添

加物は476品目に増えている。

（山田正彦『歪められる食の安全』より）

- *1 技官……………特別な学術や、技芸（美術、工芸、手仕事など）に関する仕事をする国家公務員。
- *2 税関……………港、空港や国境で、船や貨物の取り締まり、輸入品に対する税である関税の取り立てなどの事務を扱う役所。
- *3 カクテル……………数種のベース（もと）になる酒（ジン、ウォッカ、ラムなどが多い）に果汁、シロップ、香料などを加え、混ぜ合わせた飲み物。
- *4 ウルトラC……………体操競技で、最高の得点基準であるCの技術よりさらに難しい技。奥の手、とっておきの秘策などの意味で使われる。
- *5 島嶼……………いくつかの島々。しま。
- *6 証左……………証拠。あかし。証人。
- *7 スキーム……………計画。企画案。また、政府や事業体などがおこなう対策。

問一 ―線部1「大きく影響していた」とありますが、①何に対して「影響していた」のですか。また、②「大きく」とはどのような点について言っているのですか。それぞれ最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ① ア ポストハーベスト農薬を使用すること。
- イ ポストハーベスト騒動が起こったこと。
- ウ ある柑橘類の輸入を禁止すること。
- エ 海外に農産物を輸出すること。
- オ 収穫後に残留農薬を調べること。

② ア 日本ではポストハーベスト農薬の輸入が禁止されているのに、アメリカ国内では許可されているため、OPPとTBZといった農薬を二つも輸出した点。

イ 厚生省が農薬の収穫後の使用を禁止しているにもかかわらず、アメリカはその柑橘類を輸入するために自国でも日本と同じように収穫後の農薬の使用を禁止した点。

ウ アメリカはOPPとTBZが日本で認可されていないことを承知の上で使用し、何年も前から使われてきたのに今になって問題にする方がおかしいと主張した点。

エ アメリカではポストハーベスト農薬の国内使用が禁止されていたが、日本へ農産物を輸出するために、当時まだ知られていなかったOPPやTBZを使った点。

オ 日本では収穫後に農薬を使うことが禁止されているのに、アメリカはそれを使用し、さらにそこに使われていた農薬が日本では認可されていないものだった点。

問二 ―線部2「当時のアメリカメディアは、カクテルにたとえながら日本批判を大々的に展開した」とありますが、この場合「ジン」は何をたとえたものですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本 イ 太平洋 ウ 大量の柑橘類 エ OPP オ 海洋投棄

問三 ―線部3「そもそも農薬のはずのOPPを、収穫後にかけた場合には食品添加物として指定するという、アメリカの要望に沿ったウルトラC的な超法規的措置が取られた」とありますが、「そもそも農薬のはずのOPPを、収穫後にかけた場合には食品添加物として指定する」ということがなぜ「ウルトラC的」で「超法規的措置」のですか。四十字以内で説明しなさい。

問四 本文中の に入れるのに最も適切な言葉を五字以内で答えなさい。

問五 ―線部4「十分な補償で廃業を促す意味合いの方が強かった」とありますが、「十分な補償で廃業を促す」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 政府がたくさん助成金を出すのでレモン農家をやめてほかの仕事に就く準備のために使ってほしいということ。
イ またレモンができるようになるまで一度栽培をやめて様子を見る期間のために助成金を使ってほしいということ。
ウ 大寒波でも影響のなかった数少ない優秀な国産レモンの木のみを残してほかは助成金で廃棄してほしいということ。
エ 次の年の栽培のために助成金を十分に使ってほしいので来年までは農家の仕事を休んで待機してほしいということ。
オ 政府が十分な助成金を出すので寒波で被害を出してしまうような農家は仕事をやめてもらいたいということ。

問六 ―線部5「勝者がどちらだったのかは、あらためて言及するまでもない」とありますが、勝者はどちらですか。

問七 次の一文が当てはまるのは段落番号①～⑤のどの直前ですか。その番号を答えなさい。

日米レモン戦争は世紀を超えてまだ尾を引いている。

問八 ―線部6「24年3月時点のリストを見ると、95年当時は500品目近かった既存添加物は357品目に減少。逆に約350品目だった指定添加物は476品目に増えている」とありますが、このように「指定添加物」が増えた直接の原因は何ですか。また、そこにはどのような背景があったと考えられますか。それぞれ答えなさい。

五 次の文章は、村崎なぎこ「さんさんと」（『オリオンは静かに詠う』所収）の一節です。高校三年生の「アタシ（陽子）」は、小

学生の時に百人一首競技かるたに出会い、それ以来かるた女流日本一である「かるたクイーン」を目指すほど競技にのめりこんでいきます。「陽子」には双子の妹にあたる「静香」がおり、「静香」は難聴の障害を抱えています。「母」はこれまで「静香」につきつきりて面倒を見てきました。次の本文は、「陽子」が立ち寄った喫茶店でその店のオーナーと知り合った場面に続く部分です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。なお作問の都合で表記を一部改めています。

数日後、激しい雨と雷に襲われた。

大会前の練習に来たかるた会館の窓からは、道路が川になりかけている光景が見える。

いつもの宇都宮名物の夕立だろうと高を括っていたら、だんだんひどくなってきて、バチバチと弾ける音まで聴こえてきた。

「うわー、電だー！」

小学生たちはむしろ喜んでたけど、アタシはめまいがしそうになった。レインコートを持ってきているから自転車で帰れるとはいえ、電はまずい。窓に映る自分の顔は、それでも笑顔だった。

背後に、これまた笑顔の松峰先生が立った。

「陽子ちゃん、安心して。お母さんにさっき電話したから。電混じりで危ないから、お迎えにきてくださいって」

いや、ちよつと待って！ 慌てて止めようとしたら、先生は「ああ、電話が鳴ってる」とさっさと事務室へ行ってしまった。会館にはまだほかの生徒もいっぱい残っていて、みんな窓から外を眺めている。

あのお母さんが、どんな表情をして来るんだろうか。静香ではなくアタシのために、こんな嵐の中をわざわざ。見たい、見たくない。両方の気持ちがせめぎあい、意味もなくウロウロしてしまう。

見慣れた黒い軽自動車が、玄関の前に停まった。助手席と運転席、それぞれのドアが開く。

「あ、お母さんが来た。妹も」

傘をさす妹と母が片手で手話をしている様子を見て、生徒のひとりがアタシに視線を向けた。目が興味津々といったように輝いて

いる。

「陽子ちゃんのお母さんと妹って、なんであんな風に手を動かしてるの」

「妹は耳が聴こえないから、手を使って話すんだよ。手話っていうの」

「じゃあ、陽子ちゃんも手話できるんだね！」

できないわけではない。でもアタシは、頑なに手話を使わなかった。何ひとつ文句を言わず、笑顔の「盾」をかざしていたアタシの唯一の反抗は、母と妹のコミュニケーション手段である「手話」を拒否することだった。

手話を使ったら、母と妹「ふたりの世界」の住人になることを意味する。母に振り向いてもらいたくて、ひとりで頑張ってきたアタシにとっては、自分自身を否定するようなものだった。

家族も、アタシは手話ができないと思っているはずだ。笑顔のまま無言でいたら、生徒だけでなく先生たちまでもが一斉にしゃべりだした。

「えらいね。陽子ちゃんがしっかりしてるから、お母さんも安心だ」

「妹さんの分も頑張らなきゃね」

「陽子ちゃん、お母さんや妹さんを助けてあげるんだよ」

次々に襲ってくる善意という名の刃には応戦せず、笑顔のまま後ずさった。

「はい！ じゃあ、お先に失礼します！」

礼をし、急いで母の車に乗り込んだ。

別にえらくない。しつかりなんてしてない。

頑張るって、これ以上？ そんなにアタシが頑張っていないように見える？

助けてあげる？ 自分は今まで助けてもらえなかったのに。

「お母さん、早く出して。ここ駐車禁止だよ」

後部シートに背中を預け目を閉じた。エンジンの振動に身を任せ、少しずつ心を落ち着かせる。

……でも、お母さんはわざわざ迎えに来てくれたんだ。

ちよっとだけ嬉しくなつて目を開ける。赤信号で車は止まり、助手席の静香に母が手話で愚痴っているのがシートの隙間から見えた。

「こんな豪雨の時に、車の運転なんかしたくないよ。バスで帰ってくればいいのに」

稲妻が闇を切り裂いた。落雷の地響きが足から伝わって、体を抜けていく。

笑顔、笑顔。笑っていれば、辛い気持ちも逃げていく。唇が震えてくるのを噛みしめて耐え、口角を上げた。

家に着いても雨や雷の勢いは衰えない。稲光が漆黒の夜空を照らし、落石のような雷鳴が轟く。

静香が泣けば、母が抱きしめる。でも、自分はどこで安らげる？ どこで涙を流せる？

居場所なんてどこにもない、受け止めてくれる人なんて誰もいない。

もう、ひとりでもいい。今までもそうだったじゃないか。

このまま空に駆け上がっていきたい。闇夜に姿を隠し、響き渡る雷鼓に泣き声をかき消してほしい。そう願っても、神様は叶えてくれるはずもない。結局、自分の部屋に籠って大泣きした。

期待していたんだ。お母さんは喜んでアタシを迎えに来てくれるって。「陽子、かるたに熱心なのもいいけど、雨が降る前に帰ってきなさいよね。心配するじゃないの」って苦笑いして、どこかホッとした表情を浮かべながら。そんなの、あるわけないのに。今まで生きてきて、分かり過ぎるくらい分かっていたじゃない。アタシって本当にバカだ。

すると、母が部屋に入ってきた。

「陽子。なんで泣くのよ」

やっと母がアタシを見てくれたのに、それが今だなんて。泣き顔なんか見せたくない。クッションに顔をうずめたまま答えた。

「なんでって……」

自分で分からないの？ と言いつつ終わるのを待たず、母は絞り出すように言葉を出した。

「これ以上、お母さんに気を遣わせないでよ。ただでさえ大変なんだから、家では静かに休みたいの。陽子は聴こえるんだし、ひと

りで何でもできるでしょ」

アタシが自分を守る手段は、笑顔だ。それしか知らない。
顔をゆつくり上げ、涙を拭くと母親を振り返った。

「分かりました。もう何も言わない」

最高の笑顔を浮かべて、そう言った。

大きな雷鳴が響き、瞬時に闇に包まれた。停電の中、母の姿が稲妻に一瞬照らされたけど、顔は見えない。ただ、力なく下ろした両の拳を握りしめているのだけは分かった。

その日以降、アタシは母との冷戦に突入した。自分からは話しかけないし、話しかけられてもまったく口をきかない。笑いもしない……つもりだった。しかし気が付けば目尻は下がり口角が上がってくる。笑みはもう顔に張りついているのだと思い知らされた。明日から夏休みなのに。こんな状態で家にいるなんて最悪だ。

(中略) 陽子は夏休みを利用して以前足を運んだことのある喫茶店でアルバイトを始めます。

カランコロンと鈴が鳴り、六十代くらいの女性がひとりで入ってきた。アタシは慌ててソーダまんじゅうを飲み込み、「いらっしやいませ!」と声をかける。

カウンターの座ったお客様にメニューを渡そうと近づいたら、アタシを見て自分の耳を指さした。
ピンと来た。聴覚障害者だ。

アタシは左の手のひらに、右手で線を書くようになぞる。そして、右のひとさし指を横に振る。

意味は「注文」、そして「何」。この手話は「ご注文は何ですか」で、同時に口も動かす。

手話を学んでこなかったとはいえ、母と静香のやりとりは毎日目になっているし、夕食をとる時は手話ニュース番組が流れているので、なんとはなしに覚えていた。アタシは手話ができないと静香は思っているから、姉妹間では口話と筆談で会話する。つまり実践

の経験はない。間違っていたらどうしよう。

「あなた、手話ができるのね」

それまでのどこか不安そうな表情は一変し、お客様は笑顔になり手を動かし続けた。

「アイスコヒーを……。あら、それは」

カウンターの隅にあったお皿を指さす。さっきのソーダまんじゅうが、まだ山盛りで載っていた。

「あら、やだ。出しっぱなし」

オーナーは頬を染めてアタシを振り返った。

「陽子ちゃん、手話できるんだ! 通訳してもらえるかな? よかったら、サービスですって」

ソーダまんじゅうの手話なんて見たことない。指文字でソーダと表現し、「まんじゅう」の手話をつなぐ。最後に「サービス」と手話を追加したら、お客様は目を丸くした。

「オーナーさんは、ご出身どちら? 栃木県では炭酸まんじゅうって呼ぶ人が多いのよ」

「生まれは栃木ですけど、母の実家が熊本なんです。たぶん、九州はソーダまんじゅうっていうんじゃないかしら」

「あら、熊本! 私はお城が大好きでね、熊本城には何度も……」

さすがに全部は分からなくて筆談の助けも得たけれど、話は弾みに弾んだ。アタシが(最近知ったばかりの)オリオン通りの由来を顔で説明すると、お客様は突然涙ぐんだ。

「私の父はね、終戦後の引き揚げ船が遭難して……。オリオン座を目印に生還できたんですって。冬の夜空を眺めては、父はいつも拝んでたわ。お導きくださってありがとうございます、家族のもとに戻ってくれてありがとうございますって」

ハンカチを目頭に当て、オーナーも何度も何度も頷いていた。そのまま、お客様は十八時の閉店までいらした。

「私ひとりで長い間ごめんなさいね。でも、手話でたくさんおしゃべりできて楽しかったわ。父のことも久しぶりに思い出して……ありがとうございます」

と帰っていった。

▼ドアが閉まると、オーナーは感心したようにアタシを見る。

「陽子ちゃんってさ、いろんな魅力があるよね」

「えっ。手話ができたからですか？」

「あら、謙虚ね。まだまだあるわよ。オーダーを厨房に伝える声、とてもキレイに通って気持ちがいい。何事も否定せずに聴いてくれるから、話しいもあるし……」

オーナーは指折り数えながら、アタシの良いところを、いっぱい挙げていつてくれた。

初めての気持ちだ。なんだろう、水中から浮き出たような、扉のない部屋から解放されたようなこの感情は。

努力して身につけた競技かるたの技や、心を押し殺して笑みを浮かべてきたこと以外にも、アタシには魅力があったんだ。

このままで、ありのままがいい。

盾にひびが入り、音を立てて崩れて地面に広がる。でも、恐怖はなかった。すっきりした、晴れやかな心地だ。

「素」のアタシを見て、オーナーは微笑む。

「陽子ちゃんが来てくれて、本当に楽しい夏だったわ。ありがとうね。そうだ、もしも時間が大丈夫なら、これからソーダまんじゅうと一緒に作らない？ あ、栃木だから炭酸まんじゅうか」

(中略)

できあがりには十個だった。一個は記念にとオーナーが受け取り、残りは「御家族のお土産になさい」と袋に入れて持たせてくれた。そして、別に大きな紙袋も。

「これは、私からの気持ち。陽子ちゃんのこれからの人生が、ますます豊かになることを願って。このお店でアルバイトをしてくれて、ありがとうね」

商店街のオリオン通りは、夜になると人通りがパツタリ途絶える。急ぎ足で大通りに行きバスに乗った。揺られながら袋を覗いて

みると、アルバムみたいな大きな本が入っていた。表紙は星が煌く宇宙の写真で、タイトルは『星座散歩』とある。カウンターにあった本だ。

厚い紙が挟まっていることに気づき、開いてみるとオリオン座のページだった。星をつなぐ線が猟師のイラストに重なっている。オリオンはギリシャ神話に出てくる猟師だと記述されていた。

そうか、神話ができた時代にはもう星座があったんだ。同じ星空を、人類は見続けてきている。日記に書いたり詩を読んだり……何百年何千年、そして何万年も。

挟まれていたのは、小さな色紙だった。オーナーの筆跡で書かれていたのは……。

*「オリオンは 聲なき天の聖歌隊——」

野尻抱影の詩だ！

あらためて、そのページを眺めてみた。オリオンのベルトのあたりには「オリオン大星雲」が広がり、新たな恒星が誕生し続けているとある。そして、「オリオン星雲は若く、まだ一万年」だと。

「まだ、一万年……」

そうつぶやきながら、オーナーが話していた伝説の皆既日食を思い出した。

——どれだけすごいかというと、一〇八〇年六月から二一五〇年六月の間で一番長いという。

宇宙スケールで見たら、十八歳の自分なんて塵みたいな存在だろう。星が見えるかと窓の外に視線を移したら、車内の明かりに引き寄せられたらしく小さな虫がくっついていた。風圧に負けじと、必死にへばりついている。

ちっぴけだけど、アタシも生きている。息をして、鼓動がある。塵でも、この一瞬、確かにここにいる。

落ち込んでいる暇なんてない。なんで一か月以上も母と口をきかなかったんだろう……。

帰宅すると、もう二十一時近かった。リビングのソファに母だけがぼつりと座っている。遅くなる娘を待ってたんだろうか。

「……おかえり」

今日も返事はないと思っているのか、すぐに目を伏せる。

「ただいま」

母はピクツと肩を震わせた。何を言おうかバスの中でずっと考えていたけど、自分でも驚くほど自然に言葉が出てきた。

「……今日ね、バイト先に聴覚障害のお客様が来たんだよ。アタシが手話で話したら、すごく喜んでくれたんだ」

アタシの盾はもう無い。素の顔を晒すのがちよつと気恥ずかしくて、下を見て頬を掻いた。▲

いつものように「ふうん」と聞き流すかと思ったら、返事がない。どうしたのかと顔を上げたら、視線が合った。母がアタシを見ている。見つめている。唇を噛みしめて頬を震わせながら。その瞳がみるみる潤み、目から溢れたものが一筋二筋と頬を伝っていった。

母の泣き顔なんて、初めて見る。もしかして、静香が難聴の告知を受けた日以来じゃないだろうか。思い返せば、母子手帳の懺哭の文字は水滴でにじんでいた。

母の中の何かも今、壊れたのかもしれない。

「こ、これ炭酸まんじゅう。アタシが作ったんだけど、静香と食べて」

袋をテーブルに置くと、自分の部屋に逃げ込んだ。「競技かるた練習中。入るな」と紙に書いてドアに張る。そのままサッシ戸を開けて床に座り、空を見上げた。

街の明かりが邪魔をするけれど、確かに星々が輝いている。でも、どれがなんの星だかさっぱり分からない。

ドアがノックされ、振り向いたら妹が入ってきた。片手に食べかけの炭酸まんじゅうを持ち、困ったような表情で口話をした。

「部屋に入ってごめんね。お母さん、泣いてるんだよ。理由訊いても教えてくれなくてさ。心配しないでと言うんだけど」

「なんだろうね。イヤなことが理由じゃないなら、いいんじゃない？」と口話で返そうとしたけれど、今日のお客様を思い出した。手話を通じると分かったら、とても嬉しそうだった。

ちよつと試してみようかと、口だけでなく手も動かしてみた。静香と母の世界に、片足を踏み入れてみる。

「！」

妹の目が、かつてないほど真ん丸になった。手に持った炭酸まんじゅうを一気に頬張り、アタシを指さした後、両方の人差し指を

向き合わせてくるくる回す。「手話」の意味だ。

〈手話できるんだ！〉

〈そりゃ、毎日あんたとお母さんを見てれば覚えるよ〉

〈お姉ちゃんは競技かるたに一生懸命で、手話を覚える気がないのかと思つた。私と遊んでくれないしさ〉

〈だって、静香はお母さんといつも一緒じゃん〉

静香は苦笑いしながら首を横に振る。

〈遊びたいよ、そりゃ。毎日訓練で辛かったし〉

〈……ねえ、静香。アタシの手話ってどう？ 下手？〉

正直に言うべきなのか少し戸惑っていたんだけど、肩をすくめた。

〈間違もあるけど、まあ、通じるよ。口話に例えると、聴者のお姉ちゃんが私の発語を聴いた時と同じくらいなんじゃないかな〉

そういうレベルか。でも、今日のお客様の様子を思い出すと、もっと上手になりたい気もする。

〈明日から、手話教えてくれない？〉

静香は目をさらに見開いた。

〈でもお姉ちゃんは、競技かるたの練習忙しいんじゃない？ 日本一目指すんでしょ？ なんだっけ……そう、かるたクイーン〉

アタシが目指すもの。

〈いや、バイトして思ったんだよ。時には違うことをするのも必要だなと〉

隣に腰を下ろした静香に、本に挟まっていた色紙を引き抜いて渡す。

〈今日さ、バイト終了記念にこの色紙をもらったの〉

静香は自分の指先についた炭酸まんじゅうの生地が気になったのか、色紙を受け取らずに覗き込んだ。

〈……へえ。キレイな詩だね。星の合唱ってどんな風に響くのかな〉

〈分かんない〉

〈お姉ちゃんは聴者なのに〉

妹は笑い、姉妹揃って夜空を見上げた。聴こえる自分、聴こえない静香に星の歌はどう響くのか。正解はそれぞれの心にあるのだ。

アタシは左手で丸を作り、その手前に弧を描いて右手を動かす。「日食」の手話だ。

〈日食で空が真っ暗になる時、太陽の光に消されていた星が見えることがあるんだって〉

〈面白いね。引っかけ絵みたい〉

〈なにそれ〉

〈若草ろう学校の幼稚部でよくやったんだ。画用紙にいろんな色のクレヨンを塗って、その上を全部黒で塗りつぶしたあと、竹串で引つかくの。すると、下にあるカラフルな色が見えてくる〉

〈アタシの幼稚園でも、やった！〉

ふたりの世界が交じり合う。静香は〈私、口話が得意じゃないから、今までお姉ちゃんとあまりおしゃべりできなかった。寂しかったんだよ〉と笑った。

ずっと、静香は聴こえない世界の住人でアタシは聴こえる世界の住人だと思ってた。もしかして、ふたりの世界は重なっていたんじゃないだろうか。皆既日食の星空のように。同じ空でも光の加減で見える姿は違うけれど、「ひとつの宇宙」なのだ。

〔「さんさんと」村崎なぎこ『オリオンは静かに詠う』より〕

* オリオンは 聲なき天の聖歌隊……天文民俗学者でもある野尻抱影が作った詩の一節。以下に「雪晴れの刃金いろの空で せいには煌くが而も寂として 宇宙の深い深かなたから 光の合唱を送ってくる」と続く。

問一 ― 線部1「いや、ちょっと待って！

慌てて止めようとした」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 母に遠ざけられていた「アタシ」は一人で何でも解決することが当然だったので、時間がたてば自分で対応できることにわざわざ母の手を借りるというのは納得ができて、母に頼ることは気がとがめたから。

イ 母は普段から「アタシ」に対して無関心で手をかけようとはしてくれないので、わざわざ「アタシ」なんかのために車を出すなどきつと嫌がるに違いないと察し、母に面倒をかけることは避けたいと思ったから。

ウ 母と「アタシ」は良好な関係とは言えず互いに関わりを避けてきていたので、わざわざ迎えに来てくれた母にどう接すればいいのか戸惑ってしまう自分が容易に想像できて、母と会うことには抵抗を感じたから。

エ 母が「アタシ」を迎えに来るならば妹も一緒にいてくることは間違いないので、興味本位で妹のことを聞かれる状況をわざわざここで作ることにしなかつた、それは母も快く思わないだろうと心配になったから。

オ 母が「アタシ」のことを心配してくれなくても「アタシ」は母を第一に考えているので、この電が降る中をわざわざ迎えに来るほうがかえって危ないと気づき、母を危険な目に遭わせることの不安に襲われたから。

問二——線部2「唇が震えてくる」とありますが、ここでの「陽子」の心情を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「アタシ」が同じ車内にいることを知っておきながら妹としか手話を通してやり取りをしようとしないう母の姿に、どこか「アタシ」を遠ざけようとする意図を感じて、寂然^{しやくぜん}としないう苛立ち^{いらだち}が沸き上がってきている。

イ「アタシ」を車で迎えに来てくれたという久しぶりに見せる母の優しさ^{やささ}に触れてすっかり気を許していたところに、突如^{とつじょ}として落雷^{しょうげき}の衝撃を感じる事態に巻き込まれてしまい、なすすべもない恐怖に襲われている。

ウ 母の迎えがあつてこの雨の中を一人で帰らずに済んだことにほっとして満足もしていたのに、「アタシ」のために運転することを快く思っていない母の心境を突きつけられて、やり切れないさみしさが募っている。

エ 迎えに来させられた不満を妹には打ち明けるくせに、原因を作った「アタシ」にはその本心を悟られないようにふるまう母の態度がかえってもどかしいものに感じられて、いたたまれない思いが胸に渦巻いている。

オ 母が「アタシ」の身を案じて迎えに来てくれたということが嬉しくてその喜びに浸っていたが、「アタシ」の迎えを煩わしく感じている母の本音をはからずとも知ることとなり、やるせない悲しみがこみ上げている。

問三——線部3「力なく下ろした両の拳を握りしめているのだけは分かった」とありますが、ここまでの「母」の描写を通して「母」がどのような状況にあることがわかりますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「陽子」にも母としての愛情をもつて接してあげたいとは本当は思っているが、母親の手も借りず何でもひとりでこなしてしまう姿にどこか自分を受け入れようとしないう母を感じ、「陽子」に対しては身構えてしまう状況。

イ 雨の中の運転や涙を流す「陽子」に対してなど、想定外の事態への対応は苦手で及び腰^{おおよこし}になってしまいが、助けを必要とする「静香」のためには強い母であることを自らに課しており、常にその強迫観念^{きやうはくくわん}にかられている状況。

ウ 耳の聞こえない「静香」につらい思いをさせまいと常に気を張って懸命に娘を支える生活が続けているが、その重圧にひとりで耐えることに精一杯^{せいいつぱい}で、追い詰められて負けそうになる自分をかろうじて保たせている状況。

エ 何不自由なくひとりで何でもできる「陽子」にはつい多くを求めてつらく当たってしまいがちだが、そのぶん自分の弱みは決して見せることはできないと考えており、「陽子」の前では意識して気を張り詰めてしまう状況。

オ わざわざ迎えに行つたのに「陽子」は暗に自分のことを責めるような態度を見せていて、それが不可解で腹も立ったが、神経をすり減らす余計なことは避けるために、「陽子」に対する感情は押し殺しているのが常である状況。

問四——線部4「笑みはもう顔に張りついているのだ」とありますが、ここからこれまで「陽子」がどのような生き方をしてきたことがわかりますか。四十字以上六十字以内で説明しなさい。

問五「顔」が「得意そうな顔つき」の意味になるように、 に当てはまる言葉をひらがな三字で答えなさい。

問六 ▼ ▲ではさまれた部分について、ここでの「陽子」を説明しているものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 母が自分に押しつけてきた「理想の娘」を体現しようと精一杯努めてはきたものの、もうその重圧に耐えかねていた「アタシ」は、オーナーの話を通して知った宇宙のスケールに自分の人生を重ね合わせ、生きている実感を味わえたことで晴れやかな心境になった。それを受けて、母の心中にも目が向けられるようになり、母の世界にはやはり自分の支えが必要なのだと自分の存在意義を意識できるようになっている。

イ 周囲の目を気にして気丈^{きじょう}にふるまってきた自分と、思いのままに生きようとする自分との葛藤^{かつとう}に身動きができずにいた「アタシ」は、その苦しみを察したオーナーがかけてくれた言葉が支えとなって、本来の自分を解放することの喜びに気づくことができた。それによって、すでにあきらめていた母と心を通わせることに對しても再び希望が持てるようになり、母を前にしても自分を守ろうとすることがなくなっている。

ウ 妹ばかり気にかけて自分を顧みてくれない母への反発心からずっと神経をとがらせていた「アタシ」は、オーナーが自分の良さを新たに見出してくれたことで救われた心持ちとなり、これまでとは違う姿で母の前に立てると思うようになった。その一方で、オーナーが教えてくれた皆既日食の話から自分の存在の小ささに思い至るところもあり、ありのままの自分をさらして生きていくことにはまだ抵抗を感じている。

エ これまで自分を認めてもらいたい一心で必死にもがき続け、行き場のない苦しさを感じていた「アタシ」は、自分の持つ魅力に新たに気づかせてくれたオーナーとの出会いを通じて、自分の心のままに生きる勇氣というものをここで初めて得ることができた。そしてそのことが、母の存在を求める本当の思いに気づいた自分を突き動かすものとなり、母を前にした時には素直に母の世界へ寄り添えるようになっていく。

オ 母と妹の「ふたりの世界」に踏み込む勇氣が持てず、二人との関係にもどかしさを抱えていた「アタシ」は、アルバイトで接した人々との温かなふれあいを通して、心を開くことができなくなっていた自分を変えていこうと考えられるようになっていく。

た。しかし、これまで一か月以上も母との関わりを避けてきたことを思うと急に母に話しかけるのもためらわれ、母との関係修復には悲観的な印象を抱いてしまっている。

問七 — 線部5「見つけている。唇を噛みしめて頬を震わせながら」とありますが、ここでの「母」の心情を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 陽子がかく自然に手話の話題に触れてきたことで自分と静香の世界に入ってこようとしていることがわかり、これまで静香にかかりきりだったために押さえつけてきたさまざまな感情が一気にあふれ出している。

イ 陽子がこのひと月以上も自分を避けるような態度をとっていたことに呆れもしていたが、これまでと違って自分に身構えることもなく素直に触れ合おうとする娘の姿に成長を感じ、感動がこみあげてきている。

ウ 陽子の手話を覚えていたことは家族としてのつながりを改めて感じさせたが、それならもつと静香に関わって自分の負担を軽くしてもらいたかったという陽子に対するうらめしい思いも同時に沸き上がっている。

エ 陽子が心を開いて自分とのつながりを求めてきたということに對して、あまりに急なことではどう応えてあげればいいのかもわからなくなり、自分の心の整理がつかない状況に陥って不安が押し寄せてきている。

オ 陽子の手話に高い関心を抱いていたことは意外だと受け止めながらも嬉しく感じられ、これからは陽子と一緒に静香の世話を見ていけると思うと救われた心持ちとなり、緊張がゆるんで安心感に包まれている。

問八 — 線部6「ふたりの世界は重なっていたんじゃないだろうか。皆既日食の星空のように。同じ空でも光の加減で見える姿は違うけれど、『ひとつの宇宙』なのだ」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「光の加減で見える姿は違う」とありますが、これは二人のどのような点を表現したのですか。三十五字以上五十字以内でわかりやすく答えなさい。

(2) 『ひとつの宇宙』なのだ」とありますが、これはどういうことですか。「皆既日食の星空のように」という比喩^{ひよ}をふまえて三十五字以上五十字以内でわかりやすく答えなさい。



ここにシールをはってください

受験番号

整理番号

氏名

解答用紙
(50分)

令和八年度

栄東中学校入学試験問題

國語

東大特待（1月12日）

[illegible]